研究

福川柏屋（かしわや）と福川の歴史

会員　西村修一

はじめに

わたくしごとで恐縮だが、今年（二〇一三年）の上半期九月末日をもって周南市新南陽民俗資料展示室を退室した。ご近所の年配の方から大学の先生までいろいろと教えていただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

展示室は「新南陽―」と名称にあるが、実際は福川に在る。福川小学校に隣接し、郷社辰尾（たつお）神社とに挟まれて、その参道は曹洞宗真福寺（しんぷくじ）を通って山陽道に合流する（立派な大きな石製の一の鳥居が建っている）。そこは福川のメインストリートであり、だしの素のシマヤの創業店やくすりの岩崎チェーンの第一号店があった。両会長さんはこの福川から出勤されていた。

福川の町

皮肉にも、ふるさとの歴史でよく分からないのが福川の歴史だった。灯台下暗し…。

辰尾神社も石川宮司が美祢（みね）の出身であることは分かるが、創建のいきさつは宮司さんも知らない。小学校の南の園児でにぎわう真福寺のその起源は曖昧である。福川本陣の主人の福田さんに聞いても、大陸から引き揚げてきたのでと、キーとなる福田家の歴史は『市史』などが伝える内容が精一杯だった。

展示室には、本陣関係の江戸時代の長持、箱枕、鼓、菓子器、文鎮、カルタ箱、煙草盆、キセル、両替天秤、金枡（一朱銀用）、漆器類などとけっこう豊富である。福田家文書（参勤交代の記録など）もある（拙稿徳山地方郷土史研究第三一号「篤姫と福川本陣」参照）。なのに、福田家がどういう歴史をたどったのか、ひとつはっきりしない。福川の地名は福田家から起ったという説があるくらい、〝福田家の歴史は福川の歴史である〟と言ってよいのか。それくらい核となる家であることは少しは認識していたが。

＊「江戸時代の福川村について語る場合、福川福田家を抜きには語れない。庄屋として町年寄として、町目代・本陣亭主・脇本陣亭主として、網代主として登場し、江戸時代を通じて福田家一族が常に指導的役割を果たしていた。」（『市史』）

福川駅に向かう通りと旧山陽道の交差点に〝柏屋〟があった。展示室の入口を柏屋の玄関にあった威風堂々の「龍の門」が両脇を構えている。両脇を雄龍・雌龍のこて絵で飾られた〝開かずの門〟で、貴人の来邸の時のみ使用される。お嫁入りの時も赤い絨毯が駅から柏屋まで敷かれたが、開かなかったという（関係者）。

「柏屋」の屋号入りの龍吐水（箱の中の水をポンプで吐き出す消火用具）、いかつい袖絡み（刺股・突棒と併せて、江戸時代の罪人を捕まえるのに用いた三つの道具の一つ）、銘の入った角樽といったおよそ普通の家にはないものが展示してある。町内の防災、防犯を担い、祝い事も盛大だったようだ。「柏屋新田」という開作が残っているので、事業家でもある。秩父宮のために用意されたという桧の桶風呂（昭和初）が展示してあり、すると宮様がお泊りになるくらいの資産家だったようだ。大庄屋だったのかな。本陣との関係はどうなのだろう。同じく福田姓を名乗る。「遠い親戚とは聞いているが…」と町の人の情報は心もとない。「貴族院議員を出したとか…」。

＊昭和四年十一月に秩父宮様が防府で陸軍の演習に参加されるために富海に宿泊されたという記録あるので、それに関連したものだろう。結局は福川には宿泊されなかったと雅正さんに聞いた。

『祖先記』の衝撃

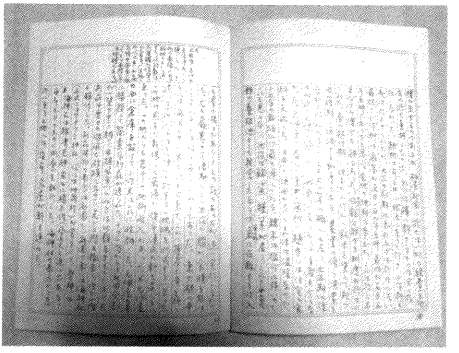
そういった中、昨年の七月、展示室で福田雅正さんの訪問を受けた。雅正さんは前南陽福川郵便局長さんであり、先般、旧郵便局の建物のことで訪ねてゆき面識ができたばっかりだった。柏屋の邸宅はすでになく（現在、山口銀行福川支店・中村医院）、当主は東京に住んでおられることは知っていた。近年その当主が亡くなり、遺品などの整理をしておられた奥様より、仏壇の引き出しから出てきたと雅正さんのところへ送られて来たのが、当主の父君の悌夫氏がしたためたノート（「祖先記」）だった。悌夫氏は衆議院議員だった。手書きの「祖先記」は悌夫氏に至るまでの福田家の歴史を綴ろうとしたものだった。悌夫氏が見聞きしていたことや家の伝承、福田氏の歴史を調べたり、戒名などを検証したりして、収録し検討を加えたものだ。

今までに忘却の霧に隠れていた福川史がその姿を現すことになって、展示室始まって以来のエキサイティングな資料発見となった。

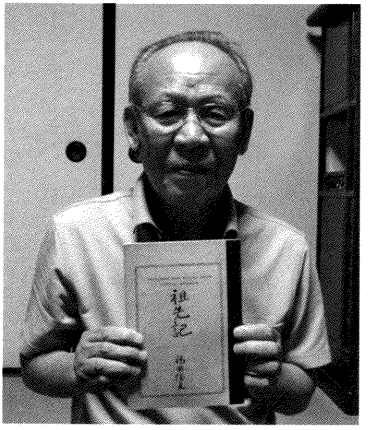
＊奈良時代の橘諸兄からおこし、福田氏の起源に迫りながら、福川福田氏の隆盛の礎を成した柏屋の五代目の丈之進までの、いわゆる福川福田氏の創世記というべきものを採録している。「祖先記」は秀夫以降がないが、続きの予定があったのか。

柏屋新宅（分家）の雅正さん自身や福川の資料館に十年いた私でさえ、えっ国会議員が三人もいたのか、そういうことだったのか、と得心したくらいだ。ましてや福川の住民や地元の郷土史家にとっては衝撃の刊行本となるだろう（すでに新聞報道され、図書館等に配布されている）。

本陣と柏屋は同族なのか、と資料館で尋ねられた地元の方に、「みたいです」としか答えられなかった私には、福川史におけるバイブルとなりそうだ。雅正さんと話をするなかで、福田家個人のことながら（非売品）、製本を決意してくださったことに、私たちは感謝しなければならないだろう。



ノートには几帳面に
びっしり書き込まれていた



新宅の福田雅正さんと
「祖先記」ノート

福川本陣と柏屋

何より福田一族の家系がはっきりしたことが収穫である。昔人は一人に複数の名前が存在したり調査に混乱をきたしていたことも原因だった。篤姫さんを泊めた時（嘉永六年九月九日）の本陣の主人は何という人だろうと思っていた。お隣の富海本陣休憩時の亭主は石川澄之進と分っているのに（「御大名様御通路控」／前掲書参照）、地元がはっきりしていないのは口惜しかった。福田四郎兵衛半僊（文化八年～明治一七年）が四〇代前半の時、篤姫様をお迎えしたようだ。

初代の和泉守正吾（建咲院位牌による／寛永一三年歿）の長男但馬守信正（慶安元年歿）が家督を継ぎ、次男の太郎左衛門が分家し庄屋となり、脇本陣としてもサポートした。のちにもう一軒の脇本陣（信金付近）ができて庄屋となったために（「夜市川の水は尽きても木屋の身代は尽きない」と言われた木屋だ。多くの船を所有しており、海運業か）、「古庄屋」と呼ばれるようになった。

古庄屋の太郎左衛門の長男の忠左衛門が家督を継ぎ、

弟の嘉兵衛（文化一〇年～明治十三年）が分家し、「柏屋」を始めた。嘉兵衛の後を原田家から養子に来た丈之進（天保五年～明治三〇年）が柏屋を隆盛させた（貴族院議員）。貴族院議員となるには見合った資産が必要である。

以降、民平（明治一〇年～昭和九年）、悌夫（明治二八年～昭和四一年）と国会議員が三代続いた。

民平は歴代当主の中でも柏屋グループ（銀行業、新田経営、各事業）を手広く飛躍させたやり手でもあったが、地元への貢献もスケールが大きい。明治四〇年に福川尋常小学校に図書館を設立している。通路や門前敷石、教育費、道路整地、小学校建築費の援助、図書の寄付など福川小学校は福田家に足を向けて寝られないほどだ。

現福川の周南市ふれあいセンター内の福川図書館が整理の対象にあげられた時、市議会議員さんが展示室に調べに来られた。そのとき、小学校の旧図書館が今の図書館につながることを初めて知った。雅正さんは当時の貴重な蔵書が失われたことを嘆いておられた。

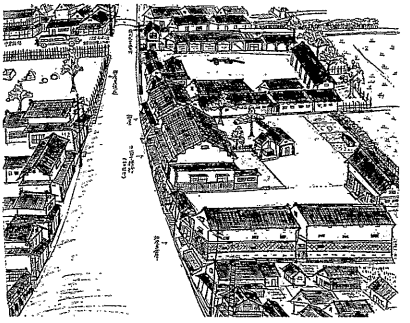
民平氏は昭和二年に福川尋常小学校にピアノを寄贈していたが、平成一五年ぐらいまで福川小学校に存在していた。破棄処分となったため、寄贈プレートのみをはがして、今は展示室入口横のケース中にピアノの写真と共に展示している。

ついでながら、第一展示室には民平氏が使った東京三越購入の立派なシルクハットが展示してある。展示室も柏屋には足を向けて寝られないほど貢献をしてもらっている。

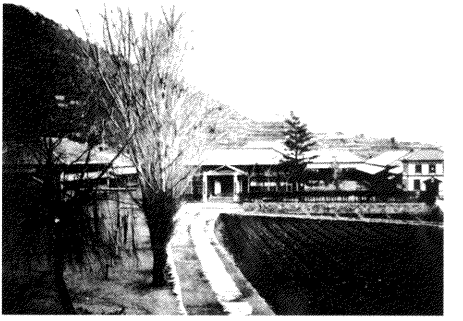
悌夫氏は最初山口中学に通っており（三年間。のち徳中へ編入）、第一高、東京帝大と岸信介氏とずっと同級生で、衆議院選挙でも地元山口で共に戦っている。

福川の起源

「福田家とは一体いかなる存在であったのであろうか。福田家に関連した古文書がほとんど散逸している現在、福田家の全容を明らかにすることは不可能である」と『市史』は前置きをしながらも、〈福田家文書〉の伝承などから福田家の起源に迫ろうとする。



昭和初期の柏屋
龍の門は山陽道に面していた
（イラスト　原田博義氏）



戦前の福川小学校と正門
右端の二階建ての白い建物が図書館

和泉守隆吉（寛永一三年四月一三日卒）―但馬守信正（慶安元年九月三日卒）―佐渡守安則（寛文四年四月朔日卒）―宇右衛門清澄（宝永五年八月二二日卒）―宇右衛門安澄（宝永五年一二月朔日卒）―宇右衛門久澄（寛延三年正月一五日卒）―宇右衛門吉澄（安永三年六月二日卒）―宇右衛門正澄（天明四年六月三日卒）―宇右衛門俊澄

＊信正のとき徳山藩創設。信正は年始歳暮、四季折々に藩主就隆に樽代などを献上し、徳山領地の替地引き渡しの際には、徳山藩側の一人として請け渡しに立ち会った。第四代宇右衛門清澄の代には、家老粟屋氏の末娘が嫁いでくるなど、本家では全盛期を迎えていた。（『市史』）

和泉守以前については、「和泉守以前有故不記」としながらも、伝承を載せる。

「戦国ノ砌、盗賊所ニ徘徊シ民之苦不大方、福田某大津住居及露見、仍テ国主之命有之、渡陸地盗賊之蒙可為押司旨、奉従其命渡此地、頃は天正末也、然ニ此福川は浦辺白浜伝ニて左右山際民家纔両三軒、戦後之有様可悲

次第也。招四方集人民浜ヲ作畠海作田、漁亦始故以人民頗集り、町普殆連、是福川町之開祖也。」

「国主」とは誰か。天正末と言えば、秀吉の時代、輝元の治世であるが。大津島に居住していたが、福川の治安が悪いために、国主の命を受けて島をあがったという。東西の山際に二、三軒の民家がある他は、ただ美しい白浜の海岸があるばかりで、人を集めて浦の干拓などして田畑地を拡大し、沿岸域の漁業も開始した。しだいに人が参集するようになり、町が誕生した、という。

大津島以前はどうなのか。「福田大和守」なる者が九州からやってきたという伝承が福田家に伝わる。大津島に着く前に嵐に遭ったが鮪のおかげで難を逃れ、以後、本陣家では鮪を食わないのだと云う（『新南陽の民話と伝説』）。

九州起源譚は付会であろう。福田氏の起源として、肥前と結びつくのは、「平安時代末期の治承四年（一一八〇年）、光孝天皇の玄孫で三十六歌仙の平兼盛（平包守）が九州の肥前国老手・手隈の定使職に任ぜられて下向し、文治五年（一一八九）に平兼盛が討死にすると、家督を弟の兼信が継いだ。平兼信は土着して、その地を福田と名付け、自身も福田を名字としたのが九州平姓〈福田氏〉の始まりとした。元寇にも現地の在地勢力として参加している。」という史実に依拠するのだろう。

悌夫氏も「大和守」には疑念を抱いているが、悌夫氏が推す家伝としての「橘姓」説も、石を投げれば源平橘藤原に当るといわれるほど不確かなものである。

されど、『市史』の言うように、「大津島に住居を構え、強い統率力を発揮して海事に従事していた」と言い切れるような傍証はない。大津島には平家の落人伝説があるくらいだが、福田姓は知りうる限り痕跡がない。

一風変わった起源説を紹介しよう。小説なので、どこまでが時代考証なのか判らないが（『黎明』叢文社二〇〇三、湯郷将和・山瀬洋子）、「関ヶ原で敗れた後、長宗我部盛親の三男隆親は毛利輝元を頼って落ちのび、福川で自活を許された。ほどなく隆親は下松に移ったが、家臣団は土佐時代の半農生活にもどり、長宗我部の部将

だった福田氏らは、毎年正月になると下松の旧藩主を訪ね、主家再興の誓いを口上する」「（当時の福川の）漁民たちは村上水軍の子孫を名乗り、どの家にも海戦用の弩（ど）弓（きゅう）や刀剣類が伝わる。陶（すえ）氏は彼らを手なづけ非常時の戦闘用員に利用したという」と聞いたことがないようなことを書く。紹介にとどめておこう。

＊盛親の子は、盛恒、盛高、盛信、盛定であって、隆親はさがしえなかった。

辰尾神社と真福寺

村庄屋や本陣亭主が幕府の巡見上使などの下問に要領よく正確に応えるためのマニュアル本（模範回答集）『庄屋本陣亭主え御尋之御答書』には、「一、寺数御尋の時は、禅宗壱カ寺、真宗壱カ寺。一、社御尋の時は庄寺八幡宮、夜市八幡宮両所之氏子にて、当所に社無御座通可申上候」とあり、江戸時代には福川には西光寺と真福寺があったが、神社はなく、福川の住民は本陣川を境に、東西に、夜市の鷹飛原（たかとはら）八幡宮と富田の山崎（やまさき）八幡宮の氏子（うじこ）となっていた。

もとは古図に「天王社（てんのう）」とある通り（現在も天王堤がある）、福川の土地を開拓するにあたって、守護神として祀られた「天王社」が起源で（宝暦一〇年〈一七六〇〉創立〈山口県風土誌〉）、開拓が進むにしたがって、幸魂社・三島神社（共に三島開作）、恵比須社・綿津見神社（共に塩田開作）、荒神社等が奉斎されるようになり、明治四二年（一九〇九）に、この五社を合祀し、「辰之尾社」と改称した。翌年、美祢郡真長田村社の埴安（はにやす）神社（石川家）を勧請して、福川は初めて宮司を有する氏神社を持つことができた。尽力したのは、丈之進のあとをうけて柏屋当主となった秀夫（ひでお）である。一の鳥居にある「降福如川」の刻字は秀夫の撰によるものである。

真福寺は、寺記によれば、仁安等恕和尚による天正一八年（一五九〇）の開山で、いつ頃からか寺門は非常に荒廃して細々と法灯をまもっていたが、明治期の二〇世の中村龍苗住職（明治）の時、復興し隆昌したとする。嘉平衛は寺では開祖とされ、丈之進、秀夫、民平、悌夫

と総代として代々支えてきた。

「祖先記」は、天正一三年建立、開山は仁奄等恕大和尚とする。「仁奄は龍文寺徒で、建咲院二世の住持。故あって建咲院を退き、花河原に住し、毎日食を乞うて福川に出ていた云々」と建咲院の記録を引く。確かに福川御大師八十八ヶ所は花河原地区とダブり真福寺にとって花河原はゆかりのある地である。「食を乞う」ほど、その頃人は住んでいたのか。福田家が福川に定住したのも天正年間と同時期である。関係があるのか。「その頃はまだ一草庵にすぎなかった」と悌夫は書く。真福寺を隆盛ある形にしたのは福田家だった。「真（まこと）は福田の寺」と戯言されるほどの大旦那だったのである。

福川を代表する真福寺、辰尾神社という古寺社が福田家の支援や配慮によって成立していたというのは、私は福川に来て以来初めて知った事実だった。

おわりに～悌夫氏という人～

悌夫は「句集」（故山抄焼跡抄）も出している。文化人であり教養人であり、平和主義者であった悌夫が、翼賛系の岸信介に国政選挙で敗れたのも悌夫らしいではないか。

『府君原田三郎とその周辺』の「福田悌夫」の項（P88）には、「大戦前には翼賛議員同盟に所属して衆議院議員を一期務めている。」とあるが、誤解を生むので、何か明確な証拠となるものがないかと探していた時に、芦屋市在住の松崎宏氏より『棋道漫歩』（一九六一）を所有している旨の連絡があった。

「昭和十七年の所謂翼賛選挙に立候補した私は、選挙区の翼賛会方面で非時局的人物の烙印を押されあらゆる妨害を受けて落選した。それを機会にそれまで郷里で持っていたいくつかの公職をすべて辞めた。そして東京に居を構え、戦争が終わるまでは武蔵野の一隅で静かに好きな碁に没頭しようと腹を決めた。これより先、議会の秘密会で近衛首相から内外の情勢に付き詳しい説明を聴いた私は、到底敗戦の免れ難きを覚り、忍び難き敗戦ながら祖国のためには終戦の一日も早きを祈らざるを得なかった。もともと戦争に反対の私は、事態かくなる上は

なまじジタバタするよりは戦争終結に近い道を進むことこそ、日本を救う最短の距離だと信じたのだ。盲目無批判に時流を迎合する風潮こそ、安易な道だが堕落敗亡への危険な道であることを、当時はもちろん今日においてもなお且つ痛感せざるを得ない。物心両面において意を得ぬ当時の私にとっては、碁が救の神、護り本尊だった。日に非なる時局において、碁だけが〝独り尊き我が仏〟だった。私は碁に関するいくつかの随筆を次々に発表した。」（『棋道漫歩』福田悌夫P116より）

この時代の風潮にして平和思想、身の引き際といい、福田悌夫の魅力の一面を垣間見た気がした。

悌夫は農地改革などの地主制度の解体と格闘しながら、福川のいっさいに整理を付けて、東京に移り住んだ。柏屋の絶頂期を知っている悌夫には、戦後の財産処分はとても辛かっただろう。その頃、雅正少年は柏屋でその叔父に囲碁を習っていた。文化人であり、歌や詩歌に親しみ、囲碁をこよなく愛した悌夫は（腕前はアマでもトップクラス）、お家柄政界に身を投じなければならなかったが、本来なら地元で早々に家業を隠退して、文人として過ごしたかったのではないか。歌集や囲碁集など出版物がいくつかある。

＊東京帝大在学中、村松正俊、佐治祐吉らと第五次『新潮社』を創刊。福川小学校歌作詞。

柏屋で働いていたという女性が展示室に龍の門を見に来られ、「懐かしい。お嫁にまで出してもらいました」と幸せそうに話してくれたのが印象的だった。悌夫は地域の住民に愛された人徳者だった。福田家は代々そうである。「祖先記」にはそう言ったエピソードがいくつも記されている。新田の経費は一切地主側が負担していたし、大正以来、小作料の引き上げは行っていない。銀行経営もおカネを借りに来る者も多かったが、預かってくれと言う者もいた、必要要請的なものである。

『祖先記』の刊行後、すぐにさまざまなところで反響をいただき、不思議な縁をご報告いただいたので紹介したい。

当会の副会長をされていた田村悌夫氏（下松市地方史研究会会長）は当時の代議士悌夫氏に因む祖父による命

名ということをお聞きした。

また当会副会長、原田茂氏の刊行された『府君原田三郎とその周辺』（平成二四年）の三郎氏と悌夫氏は徳中、第一高、東京帝国大学と同級生だったとのこと。そのことは同書にも記されている。さらに、共著の茂氏の兄の朗氏と雅正氏とはこれまた同期（徳高第五期）で、気象庁と海上保安庁時代にはお互い横浜や神戸などで飲んでいたという。ところが、当時は互いの素性のことはあまり知らず、このたびの『祖先記』の刊行が縁で、お互いに大いにエールを交換したという。十一月に朗氏が横浜から福田氏宅に訪ねてこられたという。刊行本が明らかにした不思議なめぐり合わせである。

『祖先記』のもたらした情報は多くの検討すべき余地があるが、紙面に限りがあり、展示物や展示室周辺の寺社といった限られた視点より紹介させていただいたことを了承されたい。

『祖先記』は図書館に配布してあり、是非ご一読をお薦めします。国会議員を三代続けて出し、広大な土地を有した県下でも有数な名族が存在したことは、景気の良い話が少なくなった福川に新鮮な活力を注入したのではないだろうか。

『祖先記』の発刊に携われたことは、一〇年間お世話になった福川に恩返しができた気持ちです。関わったすべての方に感謝申し上げます。

最後に「俳句日誌」より抜粋して、みな様に紹介します。

梅雨晴を戦闘機きらら光り飛ぶ　（長男）協平出征　昭和一九年七月

軍国の秋や国民服の棋伯　呉清源と同軍　昭和一九年十一月

禅寺に隣る料亭の河豚の味　岸信介と愛宕山にて　昭和一九年十二月

住職は出征し境内は花盛り　真福寺　昭和二〇年四月

焼夷弾降るや月光を熱くする　徳山空襲　昭和二〇七月

天暑し山河敗報を聞く日なり　日本敗る　昭和二〇年八月

田地売る話に暮れて夕時雨　田地売却に乗り出す　昭和二〇年十一月

拘置所の塀に沿い行く朝暑し　巣鴨　岸信介面会　昭和二一年六月

2013年(平成25年) 10月22日(火) 第17143号

日刊新周南 THE DAILY NEW SHUNAN

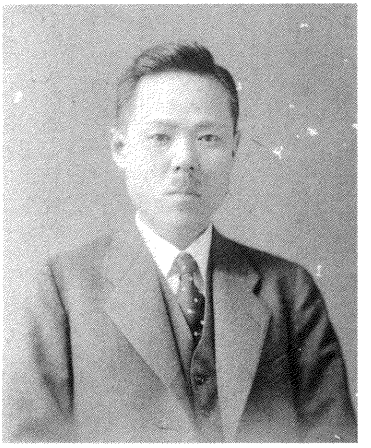
福川銀行、図書館創設

『福川柏屋祖先記』

●周南●

福田家の子孫が出版

地元の新聞に大きく取り上げられた



「祖先記」を著した福田悌夫氏
（衆議院議員時代）

将棋指す浴衣の腕は太り居り　菊池寛を訪問　昭和二一年七月

雪の日の税務署の門を潜りけり　財産申告　昭和二二年二月

煙と火焔に春の雲追はれ　福川大火　昭和二二年四月

鬼やんま保有田の上を飛びにけり　農地改革保有田　昭和二二年九月

物納のわが田刈られてゐたりけり　財産税物納　昭和二二年十一月

断罪の速報に皇都暮れ易し　A級戦犯判決　昭和二三年十一月

寒燈や名人の頬豊かなる　将棋木村名人と碁打つ　昭和二三年十二月

〔参考文献〕

『新南陽市史』　新南陽市　一九八五

『新南陽の民話と伝説』　新南陽市教委　一九七三

『黎明』　湯郷将和・山瀬洋子　叢文社　二〇〇三

『山口県神社誌』　山口県神社庁　一九九八

『山口県寺院沿革史』　県寺院沿革史刊行会　一九三三

『府君原田三郎とその周辺』　原田朗・原田茂　二〇一二

『福川柏屋　祖先記』　福田雅正　二〇一三

『棋道漫歩』　福田悌夫　再建社　一九六一

『桝山堂閻話』　福田悌夫　一九三四

『俳句日誌　故山抄焼跡抄』　福田悌夫

『篤姫と福川本陣』　徳山地方郷土史研究　第三〇・三一号　二〇〇九　二〇一〇